平成24年12月1日発行　第43巻 第12号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊
地域保健

12
2012

●特集
子どもの事故を防ぐ―傷害予防の観点から

●フロントランナー
殿谷加代子さん《那賀町相生保健センター 課長補佐》

●ピープル
古久保俊嗣さん《NPOエガリテ大手前 代表》

FRONT RUNNER
フロントランナー

地域を知り、住民を知り、そしてつなげていく――

健康づくりから始まった小さな町の大変革

徳島県那賀町

殿谷加代子さん

那賀町相生保健センター課長補佐

文：編集部　写真：カミヤス セイ

那賀町は、２００５（平成17）年に鷲敷町、相生町、上那賀町、木沢村、木頭村の丹生谷の５町村が合併して誕生した。丹生谷地方とも呼ばれている。人口は９８９０人、65歳以上の人口は４０７３人で、高齢化率は約41％（２０１２〈平成24〉年９月末現在）。町の中心を那賀川が流れ、川に沿って道路が走っている。町の面積は約７００平方キロメートルで東西に広い。那賀町の道路の端から端までを車で走ると、優に２時間はかかる。西の端っこは高知県との県境である。那賀川は、少し白濁した、孔雀石のような深い緑色。この町の人は、この美しい川の色を見ながら大人になっていく。

相生保健センターに到着したのは秋の祝日の日暮れ時。正面玄関は閉じており、手書きの「地域保健さん、こっち↓」の看板を頼りに、脇の入り口からおじゃました。

那賀町の中心を流れる那賀川

自然豊かなふるさとで仕事がしたい

今回のフロントランナーにご登場くださったのは、那賀町相生保健センターの殿谷加代子さん。休みの日にご協力いただいたにもかかわらず、元気いっぱいの笑顔で私たちを出迎えてくれた。

殿谷さんは、生まれも育ちも那賀町（合併前の上那賀町）のご出身。一生に一度は県外に出てみたいと思い、高校卒業後、親戚のいる名古屋の中部労災看護専門学校へ入学。その後お兄さんのすすめもあり、保健師を目指して徳島県立看護専門学校に進んだ。

「私は子どものころから田舎の風景が大好きでした。県外暮らしを体験して改めて、この町の自然豊かな環境の中で仕事をしたいと思いました。そして保健師として地域住民と一緒に健康づ

特集

子どもの事故を防ぐ

傷害予防の観点から

わが国の子どもの死因は、50年以上もの間「不慮の事故」が第1位。にもかかわらず、これまでは具体的な対策は皆無に近い状態でした。

しかし近年、世界保健機関（WHO）が推進している「セーフコミュニティ」への関心が高まり、各省庁でも少子化対策の一環として子どもの安全対策へ重きをおくようになるなど、徐々に科学的、工学的な観点も含めた対応策を考えていく空気ができつつあります。

特集では、現在進められている傷害発生メカニズムの解明や傷害データ収集・分析等の科学的な研究成果、そして先進的な自治体の取り組みをご紹介いたします。

P18 事故による子どもの傷害を減らすには
安全な社会をつくるために
◎山中龍宏（緑園こどもクリニック）

P25 科学的アプローチによる子どもの傷害予防
◎北村光司（産業技術総合研究所デジタルヒューマン工学研究センター）

P34 医療機関での傷害情報収集
◎西海真里（国立成育医療研究センター看護師）

P40 Love&Safety おおむら；子どもを事故から守るプロジェクト
長崎県大村市における地域参加型知識循環による子どもの事故予防活動
◎出口貴美子（出口小児科医院）

P50 子ども事故予防センターを拠点とした“セーフコミュニティとしま”の取り組み
◎栗原せい子（東京都豊島区池袋保健所）

papercraft：ヒロ

ひよこ保健師 season 6

看護師を続けるうちに地域に目覚めて

先輩の背中を追いかけ、ただいま奮闘中

垣見春奈（かきみ はるな）さん

●雲南市健康福祉部健康推進課

◀市役所裏手にある久野川沿いの遊歩道にて。春になれば桜が満開になる。

◎文・写真
西内義雄
（医療・保健ジャーナリスト）

「山の中の牧場で、自給自足をしながら暮らしたいと思っていたんです。牛と畑は絶対条件でした」

子どものころの夢を聞くと、楽しそうに語り出した垣見春奈さんは保健師2年目の30歳。なぜ牧場だったのか聞くと「あのころは牛乳が大好きでした」と無邪気に笑う。インタビューは初っ端から楽しい話題で盛り上がった。

垣見さんの生まれは県内の松江市だ。公務員の父と専業主婦の母。将来の夢に医療を意識する要素はなく、20代半ばで結婚して牧場生活ができたらいいなとの思いは高校生まで続いていた。意識が変わったのはある体験をしてからだ。

「高校2年のとき、私が将来の目標を決めていないことを心配した先生が『じゃあ、ここに行ってみたらどうだ？』と提案してくれたのが看護体験でした」

当時から看護師に向いていると思われていたのかは分からない。勧められるままに体験をしてみると

「足を洗ったりご飯の介助をしたりするたび、いろいろな人たちから『ありがとう』って言われました。今までこんなにありがとうを言われたことがなくて、言われたことがうれしかったのです。それに、機敏に働く看護師の人たちがとても格好良くて『コレだ！』と思って目指すことにしたんです」

クラスは文系、数学などは嫌いで英語と地理が好き。そんな人がひとことで看護の道に進むとは、人間、何がきっかけになるのか分からないものである。

保健師は就職が難しい

一気に看護師になった垣見さん。県内の大学の看護学科への入学を果たした。ちなみに、垣見さんは今まで島根を離れたことがない。

「昔も今も、島根から出ようという気になれないのです。言葉も食文化もみんな、他の地域では暮らしていけないと思うほどなんです。だから受験も島根以外一切考えていませんでした」

大学生活は実習の授業を重ねていくたびに怖さを感じた。

「3年生のとき、腰を痛めた整形の急

▲住民を前にした事業は新鮮味を感じている（写真提供　垣見さん）